

27. 名張の農業

名張では豊かな自然環境や盆地特有の気候を生かして、伊賀米をはじめ多くの農産物が生産されています。一方、後継者不足や耕作されない田畑の増加などさまざまな問題もあります。ここでは農業の新しい動きを紹介します。

1. 地域づくりと農業

今、名張では、農業を各農家だけでなく、地域ぐるみで行っていかこうとする取り組みが進められています。みんなで協力し工夫しながら組織的に取り組むことにより、地域の気候や特色を生かしたり、より良い農作物を効率よく大量に生産したりできます。地域住民の創意工夫と協力によるこの取り組みは、地域の将来を見守った「地域づくり」の一つでもあります。



旧錦生小学校給食室

(1) 木の子の里 (錦生地区)

錦生地区は、高齢者の割合が高く「長生きをしながら豊かに暮らせるまちづくり」が課題になっています。となりの赤目地区は、古くからマツタケの産地として有名だったことから、「香りマツタケ、味しめじ。赤日がマツタケなら、錦生はしめじ」ということで、2013（平成25）年から錦生地区でのしめじづくりが始まりました。

1年目はそれぞれの家庭に菌床を配り、しめじ栽培に取り組みましたが、しめじは室温を17℃、湿度を100%に保ち、日光をしゃ断しなければうまく育ちません。そこで、閉校になった旧錦生小学校の給食室を改装し、そこを拠点として栽培することにしました。

今では、しめじ、きくらげ、しいたけ、ひらたけ、うすひらたけ、なめたけの6種類のきのこを栽培しています。収穫されたきのこは、学校給食、レストラン、ゴルフ場等に販売されています。

2018（平成30）年からは「赤目の里山を育てる会」と連携し、地域ぐるみで力を合わせて取り組んでいます。そして、品質の向上にも取り組み、2021（令和3）年には人と自然にやさしい生産物として「みえの安心食材」に伊賀地域で初めて認定されました。



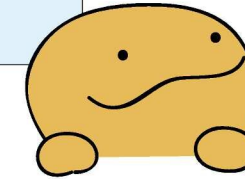
収穫をむかえた
にしきおしめじ



出荷作業

(2) 「美旗メロン」をブランドに (美旗地区)

「美旗メロン」は、重さ1.5~1.7kg、糖度(甘さ)15度以上ないと認めてもらえないんだよ。



美旗メロン

美旗メロンは、昼間は暑く夜間は寒いという盆地特有の気候を利用しています。実は、この寒暖差のはげしい気候がメロン栽培にはとても適しています。

美旗でのメロン栽培は、1995（平成7）年、美旗公民館（現在、美旗市民センター）活動の一つとして始まりました。発泡スチロールで栽培し、品評会や夏祭りでの販売をしていました。しかし、年々会員数が減り、味にもばらつきがあるなど課題もたくさんありました。2004（平成16）年には、当時の伊賀南部農協（JA）に「メロン部会」が結成され、本格的なメロンづくりが始まりました。



ハウスで大きく育ったメロン

どの家でも同じように品質のよいメロンが栽培できるように、肥料は同じボカシ（落ち葉や腐葉土などの有機肥料）を使い、ビニルハウスで栽培しています。

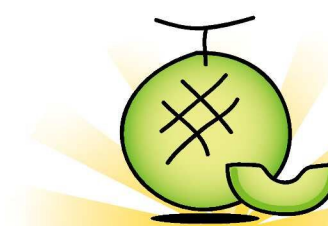
ビニルハウスで栽培していても天候に左右されるため、特に雨の降りすぎや日照時間の不足には気をつけています。こうして大事に育てても、実は1本のつるに1つだけ。形の良いものしか残しません。しかも、途中で虫に食われたり病気にかかったりと、苦勞の連続です。

今では、直売所に連日、行列ができ、整理券を発行するものの、人気でお昼ごろには完売してしまいます。

これからも「美旗メロン」のブランド名にはじかない、おいしいメロンを守っていくために、後継者の育成が課題になっています。



直売所に並ぶ人たち



★平成25年、地域団体商標登録を取得!

★伊賀地域の農産物としては第1号!

★メロンとしては全国で3番目の取得!

2. 農業と福祉

だれもが個性を生かし、働きたいという願いを持っています。しかし、さまざまな課題もあり働く場が十分ではありません。一方、農業ではたずさわる人の高齢化や、担い手不足などが大きな問題となっています。

そこで、名張市では、障がいのある人が農業分野で働くことによって、農業を活性化していくことをめざして、2009（平成21）年に全国で初めて、農業団体、福祉団体、市などが協力して「名張市障害者アグリ雇用推進協議会」を設立しました。

障がいのある人が農業を体験し、農業への親しみを養い、農業を働く場としていこうとするものです。また、受け入れる農家と障がいのある人をつなぎ、農作業を支えんする「農業ジョブトレーナー」も養成し、より働きやすくなるようにしています。2022（令和4）年現在、ジョブトレーナーの登録者は97名、また、協力している事業所や農家も25か所あります。

そのうちのひとつが南古山にある「アグリー農園」です。ここでは、小松菜、水菜、リーフレタス、フリルアイス、ベビーリーフなどを水耕栽培で生産しています。水耕栽培された野菜は、えぐみが少なく食べやすい



南古山にある「アグリー農園」のビニルハウス

のが特ちょうです。土がついていないので、衛生的で調理もしやすいです。

水耕栽培では、太陽の光と地下水と雨水を使っています。ビニルハウス裏の大きなプールには雨水が貯められていて、この水がビニルハウス全体に流れています。自然をうまく利用して栽培しています。

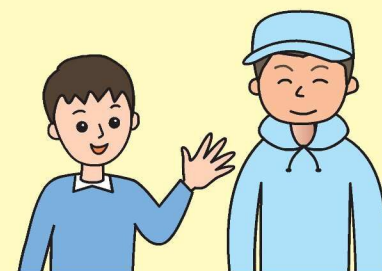


支えん員とともに作業

この水耕栽培が障がいのある人の就労訓練に適していると考え、2013（平成25）年に、NPO法人「あぐりの杜」を立ち上げ、障がいのある人の自立（就労）支えん事業をスタートさせました。「アグリー農園」でおこなわれている水耕栽培は、作業工程がわかりやすく、働く環境も衛生的なので、障がいのある人たちが仕事につき、生きがいを感じて働ける場所となっています。また、経験豊かな支えん員と共に作業をすることで、「働くことの大切さ」を学び、一人ひとりの個性を生かしながら社会参加をめざして活動しています。

障がい者福祉 【→P50】
障がい者雇用 【→P73】

なぜ、農業ジョブトレーナーになろうと思ったのですか



障がいのある人にも農業の魅力を知ってもらいたいと思ったのがきっかけです。農業にはいろいろな作業があるので、障がいの程度に応じて可能な作業があると思います。まずは、体験などを通して農業の魅力や仕事をする事の喜びを知ってもらえたらうれしいですね。これからも、農業が働き場所となるように、受け入れ農家と障がいのある人の橋渡しをしていきたいと思っています。

3. 名張で始まった「6次産業」＜名張・ワインプロジェクト＞

「6次産業」とは、農林漁業をしている人が農畜産物・水産物を生産・収穫するだけでなく、それを加工し、販売にも取り組み、それによって農産物などの価値を高めながら農林水産業や商工業を盛んにし、地域の経済を豊かにしていこうとするものです。

名張でもこの取り組みが始まっています。名張ではぶどう作りが盛んですが、ぶどうを作るだけでなく、それをワインにして販売していこうとするものです。名張をワインの産地にしていこうと旧国津小学校の施設を活用して、2018（平成30）年からワイン造りが始まっています。

ワインプロジェクトにたずさわる人から、話を聞きました。

ワインの本場であるフランスやスペインで2年間修行し、その後、滋賀県でワイン造りの会社に就職しました。そこでの経験や教えてもらったことを生かしながら、ふるさと名張で自分自身が納得できる、こだわりのワインを造りたいと思っています。

現在、他の地域から購入したぶどうと市内で栽培している醸造用のぶどうを使ってワインを造り、酒屋やレストランに販売しています。今後、地元での醸造用のぶどう栽培を増やしていく予定です。

これから、同じようにぶどうを作っている人やワイン造りをめざしている人たちと協力し、仲間を増やしなが、名張でのワイン造りを進めたいと考えています。



工場の醸造タンク



名張の農業について、ほかにもどんな取り組みがされているか調べてみましょう。